

原子の偏倚があらわす時空間と因果認識について
加戸 友佳子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科学術研究員）

本発表では、エピクロス哲学において提出され、青年時代の K.マルクスが学位論文においてその意義を拡張した、原子の偏倚運動について、その認識論的意義を考察する。

偏倚とは、エピクロス原子論の原子規定であり、直線落下運動からほんの少し逸れる運動である。これはいつ、どこで起きるかわからないものとして設定されている。一見すると恣意的な運動であるが、マルクスは、この偏倚にエピクロス哲学全体を貫く意義を見出している。必然性からの逸れの運動があることによって初めて、自然界の生成や人間の自由が可能である、と説明しているのだ。偏倚によって、偶然による自由意志の説明が可能となり、世界生成の原理として偶然が意味をもち、自然に関わって倫理や実践の問題が提起されることを、マルクスの学位論文は示唆している。重要なのは、自然界が原子によっていかに作られるかという自然学の問題と、人間がいかに生きるかという実践的問題を連続したものとして捉える視点をエピクロスが持っていた、という理解がなされていることである。

エピクロス哲学には、哲学者（一人称としての）自身も原子でできており、哲学することが人間の意志でありかつ自然現象でもあるような世界認識がある。そこから言えるのは、哲学者としての自分自身を世界の内部の存在として位置づけていること、自然を必然的で固定的な決定論ではなく、変動するものとして捉えていることである。原子の偏倚は、マルクスにとって、エピクロス哲学のこのような特徴を表現するエッセンスであった。

以上のような認識は、科学知の変動（パラダイム転換）や人間と科学知との認識論的・実践的な関係を問題にする現代の科学論において、むしろ意味を持って考えると考えられる。例えば M.セールは『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』において、偏倚に現代の物理学やパラダイム転換の問題を見出している。そこで、現代の先行研究が偏倚をいかに解釈しているかを、以下の 3 つの視点を軸にして検討していきたい。これらの視点は、自然認識における人間主体の位置付けを重要視し、人間の認識と現実の自然との関係にも自覚的である点で共通しているが、それぞれに意義と問題がある。

1.偶然と必然との弁証法的な関係。偏倚が表現する偶然によって、必然（自然法則）はどのように変わっていくか。

2.構造主義的解釈。偶然性は歴史から目的論を排除しており、必然のほうが偶然に従属するものとして捉えられる。

3.因果の複数性、時空間の多様性を主張する見方。偏倚は歴史の発展の中で起こる変異を表現し、論理空間と現実の自然とのズレを表現する。